

50年後の卒業旅行

9期の仲間

確か一年くらい前の千葉組の飲み会だったと思うが、誰からともなく「卒業後50年の集まりをやりたくないなあ。できれば、東海地方で開いてほしい。」という話が出た。

千葉組の世話役の伊藤俊成（以下敬称略）から東海地方に住む仲間に連絡してもらったところとんとん拍子に話が進み、同期の仲間に50年後の卒業旅行の案内が届いた。

参加したのは、幹事の白井勇と保田敦、そして千葉組（伊藤俊成、伊藤博道、清水一、鍋島武、吉田洋次郎）と準組員の山中重夫の8名である。

令和元年10月中旬のある日、JR名古屋駅に集合し、関西線で三重県四日市市に向かった。

途中、木曾川の鉄橋を渡り、三重県に入ったころ鍋島が「実は俺、三重県は初めてなんだ」と。欧米を股に掛けて仕事をしてきた男が、足元に空白箇所があることをぼつりと告白した。

約30分で四日市駅に到着し、迎いのバスで御在所岳ロープウェイ湯の山温泉駅へ到着した。いざ、御在所岳に登ろうと思って意気込んでいたら幹事の白井がロープウェイの前売り券を配布してくれた。誰一人拒否もせず素直に受け取りロープウェイに乗り込んだ。

約15分で高低差780mの山上公園駅に到着した。そこで観光リフトに乗り換え、三重県と滋賀県の県境の標高1,212mの御在所岳山頂へ着いた。

ふもとの気温は19度だったが山の上ではおそらく10度以下だっただろう。セーターを着込んで寒さに備えた。



御在所岳山頂にて

紅葉にはまだ早く、天気は生憎の曇りで肌寒かったが、山頂からは名古屋市内の高層ビル、伊勢湾に浮かぶ中部国際空港そして反対方向を見れば琵琶湖を望むことができた。

当然のことながら下りもロープウェイで、しかも床の一部がガラス張りで真下が見える新型車両を選んでの下山だった。



御在所岳ロープウェイ

駅前で待っていてくれたホテルのバスで本日の宿泊地湯の山温泉グリーンホテルに移動した。

チェックインしてすぐに温泉へ直行。冷えた身体には温泉は最高のおもてなしだった。

天気予報では雨の確率が高かったが、幸いにも降られずすんだ。幹事の白井が「天気は幹事の責任。どうだ降らなかつたらう」と小鼻をピクつかせて宣った。

宴会までの間は、テレビでプロ野球のドラフト会議に釘付けだったが、一巡目の指名が決まったところで、待ちに待った宴会が始まった。

料理は白井が現役のころにお世話になったホテルの社長から差入れの刺身の盛り合わせも加わり豪勢なものが並んだ。飲み物はビール、焼酎そして地元の“三重の寒梅”の甘口・辛口を堪能した。



宴会（まだ酔っぱらっていません）

部屋に戻っての二次会は、たぶん11時ころにお開きになったと思う（というのは吉田がこの間

隣の部屋でほとんど寝ていたので詳細は書けない。

みんな寝つきは早い、数時間後にはゴソゴソと起きだしてトイレへ。そしていびきの競演。にぎやかな夜であった。

翌日は本格的な雨。昨日幹事の白井は「今日は保田が幹事だから、天気は彼のせいだ。」と開き直っていた。

朝食後、ホテルのバスで近鉄の四日市駅へ送ってもらい、特急に乗り約1時間で宇治山田駅に到着した。

雨の中、まず歩いて伊勢神宮の外宮へ向かったが、途中で1人がリタイアした。さらに彼をサポートするために2人が抜けたので残りの5人で外宮を参拝した。バス停まで戻り、待っていた3人とともにそろってバスで内宮へ向かった。



おかげ横丁案内図

昼にはちょっと早い、先に食事をしようということになりおかげ横丁で名物の“伊勢うどん”ではなく、漁師めしがルーツの“手こねずし”を食べた。鮪の漬け丼とよく似ていてとてもおいしかった。

次第に雨足が強くなってきた中、リタイアの1人を残して7人で宇治橋を渡り、内宮を参拝した。



内宮参拝

五十鈴川も今日ばかりは流れも早く濁っていた。

皇位継承と大嘗祭が重なって、平日で悪天候に

もかわらず、多くの参拝者でにぎわっていた。

お参りを終えて仕上げは“赤福とお茶”で疲れた身体に甘味を補給した。

ひと休みし、家族への土産物を買ってタクシーに分乗して JR 伊勢市駅へ。予定より1時間早い列車に乗り名古屋方面へ。途中の桑名駅で白井が下車し、残りの7人は無事名古屋へ到着した。

今回の再会を楽しみにそれぞれ家路へと向かった。

今回の卒業旅行では、いろんなことがあった。久しぶりに会ったのでつい飲みすぎて翌日は食欲がないひと。足がつって歩けなくなり、神宮参拝をパスしたひと。スマホを変にいじったため直し方が分からず売ったNTTドコモ（伊藤俊成の元勤務先）が悪いと悪たれをつくひと。帰りの新幹線の指定券の日を間違えて購入していたため買い直したひと。幹事からの案内状に間違えないようにカラフルなマーカーと付箋をつけて参加した几帳面なひと。事前メールで名古屋～四日市間の乗車券は幹事が用意すると書いていたにもかかわらずその区間の乗車券を持っているひとなどなど。

70歳を過ぎた我々が今まで失敗や経験してきたことの数々が今回の旅で再現されたことを暴露したところでこの旅行記を閉める。

《 追 記 》

幹事が案内を出した22名の同期の仲間のうち「病気療養リハビリ中、高齢家族の介護、母親の葬式あるいは既に予定していた旅行等」で13名が参加できなかった。

また「今も仕事の第一線で頑張っており出席できなかったひと」が1名いた。

次回は今回参加できなかった仲間たちともぜひお会いしたいです。

(文責：吉田洋次郎)